

## 特別寄稿

### 追悼 谷垣雄三先生の軌跡

#### はじめに

谷垣雄三先生がはじめてニジェールを訪れたのは1979年(38歳)であった。先生(以後、敬称略)は当時日本企業のウラン試掘に嘱託医として参加していた。その頃アラビア石油の産業医 熊谷義也医師<sup>1)</sup>に出会い、氏の友情と支援はその後30年以上も続いていたのである。

谷垣の勤務していた会社はニジェールでのウラン試掘のためのチームであったがウランが見つからず致し方なく撤退した。彼は1年3カ月の滞在で帰国せざるを得なかった。同地の医療の現状は想像を絶するもので、それにショックを受け、何とかしなくてはと第一歩を踏み出した。

そうした経験から彼は現地医療に必須の内視鏡の知識と技術の習得に励み、同時にポ茶の水のアテネ・フランセに毎日通ってフランス語をものにした。1982年JICAからニジェールの首都ニアメの国立病院に外科医として派遣され、これが谷垣にとって2度目のアフリカ滞在となった。1988年には外科教授に就任した<sup>1)</sup>。

彼はその後現地医療の向上に身を粉にして働いておられたが、彼の最大の目的は2つあって、1つはニジェールの外科医療の向上、2つ目はニジェール人の外科医養成であった。このような課題を遂行する途中で2017年3月7日に76歳の天寿をまっとうされた。

#### 1) 信大学生時代を経て学外での研修

谷垣は京都府京丹後市に生まれ地元の高校を経て信州大学に1961年に入学した。彼が入学した頃日本の政治状況は、米国との安保改正に揺れ、それに抗議する全学連の行動が燃え上がっていた。この動向に多感な彼が影響を受けたことは充分考えられる。

また一方1960年代の後半から、鬱積していたインターン制度をめぐる問題、医師国家試験ボイコットと医局講座制反対に、東大の若手医師を中心とした青年医師連合が激しい闘争を始めた。

この運動の余波は信州大学にも波及し、当時谷垣は医学部自治会の委員長であったようだが、筆者はその詳細を知らないで、これ以上立ち入ることはしない。

大学を卒業した彼は医局に残らず大学を離れ町に出た。関東圏の病院、都内、北海道などで一般外科、胸

部外科や腹部外科、麻酔科などの研修を数年ほどした。

#### 2) ニジェール共和国とのはじめての出会い

谷垣<sup>2)</sup>は1981年に「砂漠の国ニジェール」という手記を発表した。これは彼がはじめてニジェールに滞在した1979年に、サハラ砂漠のテキタンシステムで10カ月過ごし、地元の遊牧民トゥアレグ族の生活を体験した記録である。

それを読むと彼の感動が如何に大きかったかがよくわかる。

トゥアレグ族の食事は、ヤギの乳を少し発酵させたもの、あるいはチーズにしたもので、1日2回の質素な食事であった。が、あくせくと日々の生活に追われ働くのでなく、ゆとりのある時間を満喫していた。彼はこの国の風習に戸惑う一方、感動すら覚えたようだ。

彼はニジェールの人が名誉とするのは、好意のあるもてなし、親切、優しさ、分け隔てしない対話、共に食べ、休息所を提供できることだという<sup>2)</sup>。

この追悼文では紙面に限りがあり谷垣が魅了されたアフリカの大地、現地の人達や彼の人柄をしのぼせるエピソードなどに触れられない。それらについては別に報告する予定であるため、ここでは彼がニジェールのテッサワに立ち上げたパイロットセンターの一端を紹介する。

ニジェール共和国は政治の変動だけでなく、経済の立て直しもはかばかしい成果があがらなく、経済的には世界の最貧国の一つであった。国土は日本のほぼ3倍で人口が1,500万人、1992年の1家族当たりの年収が1万円と言われていた<sup>1)2)</sup>。

#### 3) ニジェールでの2度目の挑戦

彼がニジェールに2度目の足跡を記したのは1982年であった。それは前述したようにJICAからニジェールの首都ニアメの国立病院に派遣された時である。

谷垣は1985年から1987年にかけてトヨタが提供してくれたランドクルーザーを利用し、ニジェールをくまなく探索して回った。この行動は観光を装って、国内の医療事情をつぶさに観察し、情報を収集することにあつたと考えられる。

このような彼の探索行動は、ニジェール国内の医療施設の質と量の実態調査であつて、後のパイロットセ

ンター設立に役立っている。

1992年に10年間のニアメ国立病院での外科医療の向上と外科医養成の任務を終え、JICAの援助を受け私財8,000万円をつぎ込み、ニアメから770 km離れた地方のテッサワに、現地医療の向上と自立のために、案内人を意味するパイロットセンターを設立した。

職員は谷垣医師、研修医2名と看護師6名、助手4名、麻酔士1名、検査技師2名、門番、運転手各1名の総勢10数名であった。

かつてテッサワを訪れた東<sup>3)</sup>氏の手記には、谷垣の献身的な医療活動に、大統領はじめ多くの人々が感銘を受けたと記してある。遠くから来る患者ばかりか通りすがりの人までが、谷垣を見かけると「ドクトール・タニ（谷）」と声をかけていたという。

医療機器などはJICAからの援助が中心であった。民間レベルでも谷垣のニジュールでの医療を物心ともに援助する郷里の同期生や地元の方々がおられた<sup>4)5)</sup>。

彼の医療費を節約する姿勢は徹底し、再利用できるものはすべて活用した。術後検査は必要とき以外はしないし、術後の処置や感染予防にも谷垣の工夫があった<sup>6)</sup>。

こうして谷垣が孤軍奮闘していた時期、1999年5月23日に彼の妻静子夫人が、原因不明の高熱で亡くなられ、ご遺体は広い裏庭の一角に設けられた墓地に葬られた。

1994年に彼が第22回国際医療功労賞を受賞したことは、生前に夫と共に苦勞された静子夫人へのせめてもの慰勞となったのではなかろうか。

パイロットセンターの活動は1992年から続いていたが、JICAとの契約は2001年に終了した。この前後にニジュール政府は、世銀や他の国から多額の援助を受け、自前の「人民プロジェクト」を創設した。そのた

め彼の施設はやむなく方向転換を強いられた。

そこで谷垣は2度目の挑戦として2002年にテッサワ中央診療所の隣に、新たなパイロットセンターを開設した。

しかし、機先を制するかのように先の人民プロジェクトに、2006年、世銀とフランス政府から再び資金援助があった。地元優先の谷垣にとっては、自立を目指す医療施設に、包圍網が張られたようなものだった。これほどまでに彼は追い詰められてしまった。

2008年谷垣の着実な積年の努力にシチズン・オブ・ザ・イヤーが与えられた。

2009年に第16回読売国際協力賞を受賞した。

2010年にはオムロンヒューマン大賞が授与された。

#### おわりに

谷垣のこれまでの足跡をたどってみて感じたのは、彼が忍耐強く幾度となく修羅場をくぐり抜け乗り越えたことである。ただその最期はあまりに突然であった。これだけは残念でならない。彼が現地の人々の温かくしかも優しい心に接し、人生の終の棲家をアフリカの大地に選んだことは間違っていなかった。筆者はそう思うし思いたい。

彼の人柄は一方の極に寡黙と実直、執念と信念が、他方の極には感動と憧憬、忍耐と挑戦があり、これらの両極が対立するのではなく均衡している。この特異な天性が過酷な環境や逆境にめげることなく、患者との触れ合いでは、温かい思いやり優しさとして発揮されたのである。

彼は今頃最愛の妻静子さんの墓の横で、ニジュールの砂漠の静寂に浸り、風の音に耳を澄ましているのだろう。神の祝福がありますように（完）。

藤森英之（1960年信州大学卒業、精神科医）

#### 参考資料

- 1) 熊谷義也：ニジュールで医療30年 現地住民の健康を守りつづける、谷垣先生に支援の和を広げたい。  
谷垣雄三医師を訪ねるニジュールへの旅『ニジュール紀行』30-31pp所収、2011年2月25日 NPO アジア・アフリカにおける医学教育支援機構 [OMEAAA]
- 2) 谷垣雄三：砂漠の国ニジュール『ニジュール医療報告』1999年総医研会報 No.14掲載
- 3) 東 璋：ニジュール・谷垣医師への支援について・・・11年間の医療活動に・・・『ニジュール医療報告』1993年総医研会報 No.8掲載
- 4) 肥田和子：谷垣雄三医師を訪ねるニジュールへの旅 谷垣雄三医師を訪ねるニジュールへの旅『ニジュール紀行』2-3pp所収、2011年2月25日 NPO アジア・アフリカにおける医学教育支援機構 [OMEAAA]
- 5) 平井英子：谷垣医師宅での10日間の滞在 谷垣雄三医師を訪ねるニジュールへの旅『ニジュール紀行』6-16pp所収、2011年2月25日 NPO アジア・アフリカにおける医学教育支援機構 [OMEAAA]
- 6) 中原美佳：ニジュールで医療活動を経験して一看護婦からみたテッサワパイロットセンター―『ニジュール医療報告』1995年総医研会報 No.10掲載